

真吉とお母さん

小川未明

青空文庫

真吉は、よくお母さんのいいつけを守りました。お母さんは、かわいい真吉を、はやくりつばな人間にしたいと思つていました。そして、平常、真吉に向かつて、

「人は、なによりも正直でなければなりません。また、よわいものを、いじめてはいけません。正しいと思つたら、相手がいかに強くても、恐れずに、信じたことをいわなければなりません。昔の偉い人は、みんなそうした人たちでありました。また、小さな日本くにの国が、大きな国と戦つて、勝つことができたのは、日本人にほんじんにこの精神せいしんがあつたからです。貧乏びんぼうをしてもけつして曲まがつた考かんがえを持つてはならないし、困こまつているものがあつたら、自分の二つあるものは、一つ分けてやるようにしなければなりません。」と、

日ひごろから、よくいいきかされたのであります。真吉は、外そとにいても、内うちにいても、よくお母さんの手助けをしましたが、お父さんがなかつたので、奉公ほうこうに出なければならなくなりました。それも、遠い東京とうきようへゆくことになりました。東京には、まだ顔を知らない叔父さんが住んでいられて、いい奉公ほうこうをさがしてくだされたからです。

なつかしい川、森、野原、そして、仲のいいお友だちや、かわいいペスに、白のいる村

から、そればかりか、やさしいお母さんと別れなければならぬのは、どんなに真吉には悲しいことであつたでしょう。

「僕、お母さんといつしよなら、どんなさびしいところでもゆくのだがなあ、そして、ちつとも、さびしいことはないんだがなあ。」と思つて、涙にくれました。

お母さんは、お母さんで、まだ年のいかない、だいじな、かわいい子を手もとからはなすのは身を裂かれるような苦しみでありました。

「夜中に、夜具からはみだしても、いままでのように、だれがかけてくれるだろう。かぜをひかなければいいが、なにか、なにかまで、私が世話をしやったのが、もう旅に出れば、めんどろを見にくれるものもないだろう。」と、お母さんは、ひとりであらう、涙をふいていました。

しかし、一家の都合では、どうすることもできません。いよいよ真吉の出發の日がやってきました。お母さんは、泣き顔を見せてはいけなと思つて、

「さあ、元氣よくいつておいで。道中氣をつけて、あちらにいたら、この赤いふるしきを持つて改札口を出ると、叔父さんが、迎えに出ていてくださるから、お母さんの、日ごろいったことをよく守つて、偉い人になつておくれ。こちらのことは、けつして、心

配んばいしなくていいのですから。」と、おつしやいました。

真吉しんきちは、日本男子にっぽんだんしというものは、泣なくものでないと、学校がっこうの先生せんせいからきいていたので我慢がまんをして、

「いつてまいります。」と、頭あたまをさげて、家うちを出でました。そして、後あとをふりかえり、ふりかえり、二里りの道みちを歩あるいて、町まちへ出でて、そこから汽車きしゃに乗のったのであります。

はじめて、遠方えんぽうへゆく、汽車きしゃに乗のったので心こころ細ほそかったです。窓まどぎわに小ちいさくなつて、自分じぶんの村むらの方ほうを見ていと、武たけちゃんや、哲てつちゃんが往來おうらいで遊あそんでいる姿すがたが見みえます。ペスが尾おをふつて、どうして今日きょうは、真しんちゃんはいないのかなと不思議ふしぎに思おもっている顔かおがありありと浮うかんできます。

真吉しんきちは、たまらなくなつて、しくしくとそでに顔かおをあてて泣ないたのでした。そのうちに汽車きしゃは動うごき出だしました。だんだん走はしると、いつか、見み覚えのある山やままでが、ついに見みえなくなつてしまいました。

「いまごろ、お母かあさんは、どうしていられるだろう。」と思おもうと、仕事しごとをなさっているお母かあさんの姿すがたが、泣ないている目めの中なかにうつて見みえたのでした。

しかし、それから、一時間じかんもたつと、真吉しんきちは、泣ないてはいませんでした。はじめて顔かお

をみる叔父さんのことを考えたり、はやく、自分が大きくなって、お母さんの力になってあげたいと考えていました。

汽車に乗ってから、九時間めに東京へ着きました。叔父さんが迎えに出ていてくださいました。

「よく、一人でこられたな。感心じゃ。」といって、我が子のように、頭をなでてくださいました。

その、あくる日から、二、三日というもの、叔父さんは、いそがしい体を真吉をつれて、にぎやかな東京を見物さしてくださいました。真吉は、ほんとうにやさしい、いい叔父さんだと思いました。

いよいよ叔父さんの、世話してくだされたお店へゆくときに叔父さんは、

「よく、ご主人のいいつけを守って、辛棒するのだよ。そして、平常は、出られないが、お正月にでもなつたら、ゆつくり遊びにおいでよ。」と、おっしゃいました。

お店の主人は、たいそう厳格な人でした。

「ゆるしなく、かっぴに出歩いたり、また泊まってきたようなものは、さっそく店を出ていってもらおう。」という規則がありました。

真吉は、ここにきてからは、よく主人のいつけを守って働きました。また、自分のお友だちとも仲よくいたしましたから、みんなから愛されたのです。この分なら、自分でもつとまりそうに思いましたが、夜ねるにつけ、朝目をさますにつけ、思い出されるものは、お母さんの顔でありました。

「いまごろ、お母さんは、どうなさっているだろう。」

こう思うと、お母さんのことが思われて、なりません。夜になつてから、お母さんにあつてて手紙をかいて出しました。三、四日すると、お母さんから、返事がまいりました。あけてみると、

「お母さんは達者でいますから、心配しなくていい。おまえはからだをだいに、よくおつとめなさい。」と、書いてありました。

真吉は、お母さんからきた手紙だと思つと、なつかしくてだいにしまつておきました。また、十日ばかりたつと、お母さんが恋しくなりました。ついに我慢がしきれなくなつて、手紙を書いて出しました。こんどは、待つても、お母さんから、返事がまいりませんでした。

一月、二月とたつにつれて、ますますお母さんや、田舎のことが思い出されてなり

ません。

「それにしても、どうしてお母さんから手紙がこないのだろう。病気で、ねておいでなさるのではないかしらん。」

こう思うと、母親思いの真吉はたまらなくなりました。

そのうちに、お正月がきて、一日おひまが出ました。泊まりにいく、親戚のあるものは、泊まってきてもいいというのでした。

真吉は、久しぶりで、叔父さんの家へいこうと出かけたのであります。ふと、あちらの停車場を発してゆく、汽車の笛の音をききました。

「そうだ、一日あれば、田舎へ帰ってくることができる。お母さんのところへいこう。」
こう考えると、もらったお小使いがふところにあつたのですぐさま、停車場へかけつけました。ちようど、北へゆく汽車があつて、それにのりました。

汽車の中は、スキーにゆく人たちで、にぎやかでした。真吉は、これを見て、雪がふると、お母さんは、町へ出るのに、どんなに不自由をなさるかしのれない。それなのに、この人たちは、遊びができるといつてよろこんでいる。」

こう思うと、その人たちがにくらしかつたのでした。いつしか、その人たちも、途中

で降りてしまいました。いつまでも乗っているのは、真吉のほかに三、四人で、さびしくなりました。そして、雪が、だんだん深くなりました。

けれど、晩には、お母さんのお顔が見られるのだと思うと真吉の心は、うれしくて飛び立つばかりでした。

やっと、半年ばかり前に、そこから汽車に乗って立った、町の停車場へ着くと、もうまったく暗くなっていました。そして雪が積もる上に、まだ降っていました。

真吉は、お母さんの知り合いの呉服店を思い出しました。そこで堤燈を借りてゆこうと立ち寄りしました。ふいに、真吉が帰ってきたので、呉服店のおかみさんは、おどろいて、

「まあ、どうして帰っていらしたか。」と、たずねました。

真吉は、お母さんのことを心配して、見に帰ったと話すと、

「なんの、お母さんは、お達者でいらつしやいますよ。昨日おいでになって、東京へいつている息子の春着を造つてやるのだと、反物を買つてお帰りになりました。」と、おかみさんは、告げました。

真吉は、これをきくと、安心して、いままで、張りつめた気持ちが無くなりました。

そして、お母さんの、真心からの教えが、

「お母さんのことは、心配しなくていいから、よくおつとめなさい。」と、おつしやつたことが、頭の中にはつきりと浮かんできました。

たとえ、これから家へ帰れても、この雪では、明日の中に東京へ帰ることはむずかしい。そうしたらご主人が心配なされるだろう。お母さんの達者のことがわかったうえは、いまからすぐに夜行に乗って、東京へゆくことにしよう、真吉は、思いました。そして、呉服店のおかみさんが、しんせつに、泊まっていったらというのをきかずに、停車場へ引き返して、出立したのでした。

翌日、真吉は、東京へ着くと、すぐにお店に帰って、昨日からのことを正しく主人に話しますと、主人は、真吉の孝心の深いのに感歎しましたが、感情に委せて、考えなしのことはしてはならぬと、この後のことを戒めました。

真吉は、大きくなってから、りっぱな商人になりました。そして、お母さんによる孝行をつくしたということでもあります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「真吉《しんきち》とお母《かあ》さん」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

真吉とお母さん

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>